

第廿四講 義とせらるゝ事の結果（一） 第五章の研究（十月九日）

羅馬書は第三章までに於て信仰に由て義とせらるゝと云ふ救拯の根柢的眞理を説き、第四章に入つては信仰の模範アブラハムを此眞理の證明者として擧げた、先づ説き次ぎに證明を掲げて茲に此教理は確立した、かくて人が信仰に由て義とせらるゝ事は既に明々白白となつた、茲に於てか、義とせらるゝ事の結果如何を記すべき順序となつた、これ第五章以下である。

第五章の一節に曰ふ「この故に我等信仰に由りて義とせられたれば神と和ぐことを得たり、こは我主イエスキリストに頼りてなり」と、これは既説全部の反覆と見るべきものである、我等は信仰に由りて義とせられた、既に罪を赦され義人として神に受け容れらるゝに至つたのであれば是即ち神と和ぐ事を得たのである、そして此事たる全く「我主イエスキリストに頼りて」である、彼と其十字架の犠牲に頼りてゐる、パウロは第四章までに於て此事を精細に説いたのである、然らば何故彼は斯く精細に之を説いたのであるか、そは之が實に信仰生活の基礎であり又救拯の根柢であるからである、凡そ根元的眞理は先づ精細に説かるべきものである、恰も生物學を説くに當つては先づ組織の單元たる細胞（cell）の事を詳説するが如くである、一度細胞の性質構造等が明白になれば餘は自然に理解し得らるゝのである、故にパウロは第四章までに於て信仰の義を力説し詳説したのである、そは此事が一度信受さるれば他の事は比較的たやすく領得せられ、もし此事が信受されぬ時は他の事は到底領得し得ないからである。

さればパウロは第五章に入つて先づ既說せし所を一言の下に要約し、そして二節よりは愈よ他の問題に移り行かんとするのである、他の問題とは他なし義とせられし事の結果たる信仰生活の特徴である、我等は前に三章二十一節―二十六節を研究した、そしてそれまで萬民を罪人として道義の法廷に彈劾し續けねばならなかつたパウロが、云はんとして怵へ來つた赦罪の福音を茲に堰を除かれし大水の如く灌ぎ出したことを見た、五章二節以下また之に酷似してゐる、パウロは早く信仰生活に加へらるゝ恩恵を語らんと願ひしも、その前提として「信仰に由て義とせらるゝ事」を是非とも説かねばならなかつた、且これが單純ではあるが容易くは信受し難き教義であるため、アブラハムのお話までも引用して充分に此一義を説明せねばならなかつた、恩恵の大水は避け難き且必要なる堰を以て暫し止められてゐた、今やいよいよ此堰を撤開すべき時が來つた、恩恵の大水は滔々として奔流し來らんとする、これ第五章二節以下である。

第二節には「亦われら彼（キリスト）により信仰によりて今居る所の恩恵に入ることを得、且神の榮を望みて欣喜をなす」とある、キリストにより信仰によりて來るものの中第一は「恩恵」である、第二は「神の榮を望みて欣喜をなす」事即ち希望の喜びである、これを第一節と合せ考ふれば第一、義とせられて神と和ぐ事、第二、恩恵に入る事、第三、希望の喜びを受ける事となるのである、此三段の順序に我等は注意すべきである。

罪を赦され義とせらるゝや恩恵に入らざるを得ない、恰も親に背きつゝありし子が親に赦されて其許に歸るや、親は長く抑へ居りし愛を一時に注ぎ、子は其加へらるゝ恩恵の思ひの外大なるに驚くが如き類である、げに信仰に由りて義とせられし結果として受くる恩恵は驚くべき者である、其事はこの恩恵を受けつゝある其人自身が誰

人よりもよく知つてゐる、罪の苦悶は拭ふが如く失せ、心には云ひ知らぬ平和來り、天國を偲びて現世の患難に堪へ、天よりの生命を受けて確信を以て働く、父は我祈に應じて可しと云ひ給ふが如く、我は全世界の凡ての良き人と天使と萬物と相融合するの境に入りしを感じ、萬物の悉く我有なるを（コリント前書三の二一）思ふに至る、まことに測り知られぬ恩恵である。

義とせられて恩恵を受くる状態に入りし人は「神の榮を望みて欣喜をなす」に至る、神の榮を望むとは何を意味するか、神が榮を本具し給へる事は云ふまでもない、この榮を望むと云ふのは此榮に與らんことを望む意であるに相違ない、神の本具し給ふ所の其榮の輝きを己も亦浴びんと望である、「愛する者よ我等いま神の子たり、後ち如何未だ露はれず、その現はれん時は必ず神に肖んことを知る」（ヨハネ壹書三の二）とある所の希望である、人が神となんとするのではない、神に肖た者に化せられんとするのである、一言にして云へば完成榮化の希望である、この大希望を胸に抱いて歡び躍るは、神に義とせられて恩恵の領域に入りし者の受くる大なる特權である。

義とせらるゝや恩恵を受け、更にまた榮化の大希望を與へられて喜び躍る、これ一に主イエスキリストを信ぜしと云ふ一事に由るのである、彼の十字架あるがために唯信仰のみを以て此大なる特權と歡喜を我ものとするに至る、單なる信仰のみの故に——何等功を立つる事なくして——罪人の上にかく恩恵を與へ給ふ神の愛の大なるかな！「われら神を愛するにあらず、神我等を愛し、我らの罪のために其子を遣はして挽回の祭物とせり、これ即ち愛なり」（ヨハネ壹書四の十）とある通りである。

る、忍耐と云へば我國の用法に於ては唯或る事を耐へ忍んでゐるのを意味し、専ら消極的の者であるやうに見える、漢字の原意如何は別として、とにかく之を消極的に怵へてゐる事と見るが普通の見方である、然るに原語 *υπομονη* (ヒュポモネー) は消極的に怵へて居る事を意味する語ではない、積極的に堅く立ち強く進む事を意味する語である、堅忍、剛毅、不屈、不撓等の意味を包含する語である、迫害の中にありて信仰を維持するのみならず毫も屈する所なくして進んで神の道を行ふ進取邁進を云ふのである、パウロとシラスがピリピにて町を擾す者として執へられ、はげしく杖たれ「奥の獄に入れて桎をかけ」られたるにも係らず、勇氣益々身に満ちて夜半頃「祈をなし且神を讚美」し、遂に獄吏をして其前に俯伏すに至らしめしが如き寔に好きヒュポモネーの一例である、

「忍耐は練達を生じ」とある、忍耐が患難の生む所である如く練達は忍耐の生む所である、然らば練達の意味如何、英語聖書には *experience* (實驗) とあり其改譯聖書には *probation* (立證) とある、原語は

προκιμω (ドキメー) にして元來實驗に由て得たる證明を意味する語であり、従つて斯く證明せられし状態を云ふにも用ひられる、これ忍耐の結果として福音の價值が益々實證せられて我心に一種犯しがたき信仰的確信の起りたる状態を指すのである、忍耐の結果として心に起りたる此確信は山の如く不拔である、これ實に忍耐持續の中に得たる實驗の產物である、故に世の學者がその學術的研究を以て福音に反對し又は福音に批判的研究を加ふるとも、元來信仰上の確信は斯かる學術的研究と何等の關係なきものであれば、彼等の言説を心に留めずして、余はキリストと其福音を確信すとの境地を他の侵犯を許さずして心に保つのである、信仰のために受くる多くの

患難にありて忍耐を持続する時この確信が生れる、故に其人は練達の域に達する、百戦を経^{グエテレン}し老兵の域に達する、即ち不動の域に達する、これ即ち練達である、舊き者の表面を塗りかへて此世が絶えず提供する所の、謂ゆる新思想、新運動の類——かゝる者に信仰の境地を犯されて動搖常なき者の如きは未だ信仰上の練達に至らざる者である。

「練達は希望を生じ」とある、練達の境に入つて我に確固たる希望が具はるのである、堅信、練達、確信益々増し進むや神の榮を望むの希望は殆ど我身我心の如く我存在の一部となるに至る、患難の中に忍耐を以て神の道に歩むや忍耐は練達を生み、そして練達は希望を生む、この希望、永生の希望、榮化の希望、これこそ基督者の至寶である、そしてこれ實に患難の産物である、患難が忍耐を生み忍耐が練達を生み練達が希望を生むのである、故に「患難にも欣喜^{よろこび}をなす」のである。

一、二節及び三、四節の相平行せることに我等は注意する、前者は義とせられ恩恵に入り希望を與へられて喜ぶと説き、後者は患難は忍耐を忍耐は練達は希望を生むが故に喜ぶと云ふ、甲は純信仰の生み起す希望の喜び、乙は實生活の生み起す希望の喜びである、かく兩方面より希望の喜びが説かれたのである、二節に於て「欣喜をなす」と言ひ三節に於て「欣喜をなせり」と言ひし原語は共に *keuyaoi ai* (コーホオマイ) である、之は英語の rejoice (欣ぶ) boast (誇る) glory (榮とする) 等を意味する語であつて、勝ち得てあまりある所の其勝利を喜ぶといふ意である、「我は福音を耻とせず」と云ひしパウロの心境、「此ほか別に救ある事なし」と叫びしペテロの確信、これ即ちコーホオマイである、信仰の道を堂々と闊歩して自信充ち勇氣溢るゝ充足の感である、

欣喜をなすと云ふも單なる欣喜ではない、勝ち誇る喜びを云ふのである、パウロが如何に豊かに此喜びを抱いて居たかは、彼の全文書と全生涯との立證する所である。

一節より四節までを反覆熟讀せよ、信仰生活の特徴は遺憾なく此數語の中に示されてゐるではないか、之を靈的領得の上より見れば神と和やはらぎ恩恵に入り妙なる希望を與へられて勝ち喜ぶ心境であり、之を實際生活の上より見れば患難にありても其生む所が忍耐、練達、希望なるが故に勝利の光榮に酔ふ生涯である、これ即ち「四方より患難を受くけれども弱せず、詮方せんかたつ盡くけれども望を失はず、迫害せめらるれども棄てられず跌倒たふさるれども亡び」ざる生涯である、退轉せず、委靡「いび」せず、進んで己まざる生涯である、積極的、進取的にして光明と生命とを具有する生涯である平和溫良無害の人となるが決して信仰の目的ではない、生命と力を以て進撃する生活が眞の信仰生活である、併し乍ら注意すべきは是れ自力を以て努力奮進して然るにあらず、主として救主の十字架より流れ出ずる所の生命の源に汲んで然るのである、我本具の生命に依るにあらず専ら彼の大生命に浴して然るのである、信仰生活は謂ゆる努力の生活ではない、十字架の故に罪の赦免に浴し義ならざるに義とせらるゝに至りし大恩恵に接し、感謝心に満ちて自から力ある歩みを惹き起す生活である、源あつての末である、原因あつての結果である、これ忘るべからざる事である、その故にこそ感謝は益々大となるのである。

羅馬書は第三章までに至る中で、信仰によって義と認められるという救いの根本的真理を説き、第四章に入つては信仰の模範であるアブラハムをこの真理の証明者として挙げた。まず説き、次に証明を掲げて、ここにこの教理は確立した。こうして人が信仰によって義と認められることは、すでに明白となった。ここにおいて、義と認められることの結果がどのようなかを記すべき順序となった。これが第五章以下である。

第五章一節に次のようにある。「こうして、私たちは信仰によって義と認められたので、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています」と。これは既説の全体の反復と見るべきものである。私たちは信仰によって義と認められた。すでに罪を赦され、義人として神に受け入れられるに至ったのであれば、これすなわち神との平和を得たのである。そしてこのことは全く「私たちの主イエス・キリストによって」である。彼とその十字架の犠牲によってである。パウロは第四章までに至る中で、このことを精細に説いたのである。それでは、なぜ彼はこのように精細にこれを説いたのであるか。それは、これが誠に信仰生活の基礎であり、また救いの根本であるからである。およそ根源的な真理は、まず精細に説かれるべきものである。あたかも生物学を説くにあたっては、まず組織の単位である細胞（cell）のことを詳説するようなものである。一度細胞の性質や構造などが明白になれば、あとは自然に理解できるのである。ゆえにパウロは第四章までに至る中で、信仰の義を力説し、詳説したのである。それは、このことが一度信じ受け入れられれば、他のことは比較的容易に理解され、も

しこのことが信じ受け入れられない時は、他のことはとうてい理解できないからである。

それゆえ、パウロは第五章に入って、まず既説のところを一言のもとに要約し、そして二節からは、いよいよ他の問題に移っていこうとするのである。他の問題とは他でもない、義と認められたことの結果である信仰生活の特徴である。私たちは以前に三章二十一節～二十六節を研究した。そして、それまで万民を罪人として道德の法廷に糾弾し続けなければならなかったパウロが、言おうとして耐え忍んできた罪の赦しの福音を、ここに堰を切られた大水のように注ぎ出したことを見た。五章二節以下もまたこれに極めてよく似ている。パウロは早く信仰生活に加えられる恵みを語りたいと願ったが、その前提として「信仰によって義と認められること」を是非とも説かなければならなかった。かつ、これが単純ではあるが容易には信じ受け入れがたい教義であるため、アラハムのお話までも引用して充分にこの一つの真理を説明しなければならなかった。恵の大水は避けがたく、かつ必要な堰をもつてしばらく止められていた。今やいよいよこの堰を撤去すべき時が来た。恵の大水は滔々として奔流してこうとしている。これが第五章二節以下である。

第二節には、次のようにある。「このキリストによって私たちは、信仰によって、今立っているこの恵みに導き入れられました。そして、神の栄光にあずかる望みを喜んでいます」とある。キリストによって、信仰によって来るものの中の第一は「恵み」である。第二は「神の栄光を望んで誇ること」、すなわち希望の喜びである。これを第一節と合わせて考えるならば、第一に、義と認められて神との平和を得ること、第二に、恵みに入ること、第三に、希望の喜びを受けることとなるのである。この三段階の順序に私たちは注意すべきである。

罪を赦され義と認められるや、恵みに入らざるを得ない。あたかも親に背いていた子が親に赦されてそのもとに帰るや、親は長く抑えていた愛を一時に注ぎ、子はその加えられる恵みの思いのほか大きいことに驚くような類である。実に信仰によって義と認められた結果として受ける恵みは驚くべきものである。そのことは、この恵みを受けつつあるその人自身が誰よりもよく知っている。罪の苦悶は拭うように消え、心には言い知れぬ平和が来たり、天国を思つて現世の苦難に耐え、天からの生命を受けて確信をもつて働く。父は私の祈りに応じて「よい」と言われるかのようであり、私は全世界のすべての良き人と天使と万物と相融合する境地に入ったと感じ、万物のことごとくが自分のもの（コリント人への手紙第一 三章二十一節）であることを思うに至る。誠に計り知れない恵みである。

義と認められて恵みを受ける状態に入った人は、「神の栄光を望んで誇る」に至る。神の栄光を望むとは何を意味するか。神が栄光を本来備えておられることは言うまでもない。この栄光を望むと言うのは、この栄光にあずからんことを望むという意味であるに違いない。神の本来備えておられるその栄光の輝きを自分もまた浴びたいとの望みである。「愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようなか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています」（ヨハネの手紙第一 三章二節）とあるところの希望である。人が神になろうとするのではない。神に似た者に変えられようするのである。一言にして言えば、完成・栄化の希望である。この大いなる希望を胸に抱いて歓喜躍躍することは、神に義と認められて恵みの領域に入った者の受ける大いなる特権である。

義と認められ、恵みを受け、さらに栄化の大きな望みを与えられて喜び踊る。これはひとえに主イエス・キリストを信じたという一つのことによるのである。彼の十字架があるがために、ただ信仰のみをもってこの大きな特権と歓喜を我がものとするに至る。単なる信仰のみのゆえに——何ら功績を立てることなくして——罪人の上にこのように恵みを与え給う神の愛の大きさを。「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです」（ヨハネの手紙第一 四章十節）とある通りである。

義と認められて恵みを受け望みを与えられること、このことを三節以下が詳細に説明するのである。すなわち第一節は既説の要約であるが、同時にまた一、二節を合わせて第三節以下の大意掲出と見ることができる。まず述べようとするこの主意を簡単に掲げて、その後その詳細に入るはパウロの文章の特徴である。

第一節、二節のような言葉をパウロがその聴衆に向かって発したと仮定してみよう（これは事実上あったことであろう）。ある人々は勿論感服したであろう。しかし中には無遠慮に彼に向かって言った人もあったであろう。「パウロよ、あなたの言葉は非常に良い。しかしあなたの現状はどうか。世になんらの財産もなく僅かに労働をもって生計を立て、敵は教会国内外に雲のように多く、同胞からは異端者として排斥されて孤独窮乏の中にある惨状はどうか。あなたの主張と実際とあまりに相違しているものがあるではないか」と。しかしながらこのような批判は、彼の今立てる些を覆すには余りに無力であった。パウロは得意満面の気概をもって直ちにこれに応えるところがあったであろう。すなわち三節から五節がそれである。

(3) それだけではなく、苦難さえも喜んでいます。それは、苦難が忍耐を生み出し、(4) 忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。(5) この希望は失望に終わることがありません。なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

義と認められて恵みを受け、望みにあふれて喜ぶ。ただそれだけに留まらない。苦難にあってもまた喜びをなすという。苦難の原語は *tlipsis* (スリプシス) である。聖書においては主として信仰のゆえに受けるところの迫害、犠牲、苦難、痛苦を意味する言葉である。必ずしもいわゆる迫害のみを指さず、およそ信仰のゆえに受ける一切の不利益、損失、誤解、および払わねばならぬ犠牲等を総括して「苦難」というのである。すなわちキリスト者に臨む特殊の苦難を言ったのである。

三節後半、四節、および五節は、苦難をも喜ぶところの理由提示である。まず「苦難は忍耐を生み出し」とある。忍耐といえは我が国の用法においてはただある事を耐え忍んでいるのを意味し、専ら消極的なものであるように見える。漢字の原義如何は別として、とにかくこれを消極的にこらえている事と見るのが普通の見方である。然るに原語 *hupomone* (ヒュボモネー) は消極的にこらえている事を意味する言葉ではない。積極的に堅く立ち強く進む事を意味する言葉である。堅忍、剛毅、不屈、不撓などの意味を包含する言葉である。迫害の中にありて信仰を維持するのみならず、少しも屈するところなくして進んで神の道を行う進取邁進をいうのである。パウロとシラスがピリピにて町を乱す者として捕らえられ、激しく鞭打たれ「奥の牢に入れ、足かせをかけて」られた

にもかかわらず、勇氣益々身に満ちて夜半頃「祈り、神を賛美」し、遂に囚人監視人をしてその前にひれ伏すに至らしめたようなことは、誠に良いヒュボモネーの一例である。

「忍耐が練られた品性を生み出し」とある。忍耐が苦難の生むところであるように、練られた品性は忍耐の生むところである。それでは練られた品性の意味はどうか。英語聖書には *experience*（実験）とあり、その改訳聖書には *probation*（立証）とある。原語は *dokime*（ドキメー）にして、元来実験によって得た証明を意味する言葉であり、従つてこのように証明された状態をいうのにも用いられる。これは忍耐の結果として福音の価値が益々実証されて我が心に一種侵しがたい信仰的確信の起こつた状態を指すのである。忍耐の結果として心に起こつたこの確信は山のように動かない。これは実に忍耐継続の中に得た実験の産物である。ゆえに世の学者がその学術的研究をもつて福音に反対し、あるいは福音に批判的研究を加えるとも、元来信仰上の確信はこのような学術的研究となんらの関係もないものであれば、彼らの言説を心に留めないで、私はキリストとその福音を確信するという境地を他の侵犯を許さないで心に保つのである。信仰のために受ける多くの苦難にありて、忍耐を継続する時この確信が生まれる。ゆえにその人は練達の域に達する。百戦を経た老兵の域に達する。すなわち不動の域に達する。これ即ち練達である。古いものの表面を塗りかえてこの世が絶えず提供するところの、いわゆる新思想、新運動の類——このような者に信仰の境地を侵されて動揺が常でない者のごときは、未だ信仰上の練達に至らない者である。

「練られた品性が希望を生み出す」とある。練られた品性の境に入つて自分に確固たる望みが備わるのである。

堅信、練達、確信が益々増し進むや、神の栄光を望む望みはほとんど我が身我が心のごとく我が存在の一部となるに至る。苦難の中に忍耐をもつて神の道に歩むや忍耐は練られた品性を生み、そして練られた品性は希望を生む。この希望、永遠のいのちの望み、栄化の望み、これこそキリスト者の至宝である。そしてこれは実に苦難の産物である。苦難が忍耐を生み、忍耐が練られた品性を生み、練られた品性が希望を生んだのである。ゆえに「苦難をも喜ぶ」のである。

一、二節および三、四節が相平行していることに私たちは注意する。前者は義と認められ恵みに入り望みを与えられて喜ぶと説き、後者は苦難は忍耐を、忍耐は練られた品性を、練られた品性は望みを生むがゆえに喜ぶという。甲は純信仰の生み起こす望みの喜び、乙は実生活の生み起こす望みの喜びである。このように両方面より望みの喜びが説かれたのである。二節において「喜ぶ」と言い、三節において「喜んでいます」と言った原語は共に *kauchōmai* (コーホオマイ) である。これは英語の *rejoice* (喜ぶ)、*boast* (誇る)、*glory* (栄光とする) などを意味する言葉であつて、勝ち得てあまりあるところのその勝利を喜ぶという意味である。「私は福音を恥としません」と言ったパウロの心境、「この方以外には、誰によつても救ひはありません」と叫んだペテロの確信、これ即ちコーホオマイである。信仰の道を堂々と闊歩して自信満ち勇氣あふれる充足感である。喜ぶというも単なる喜びではない。勝ち誇る喜びをいうのである。パウロがいかに豊かにこの喜びを抱いていたかは、彼の全文書と全生涯とが立証するところである。

一節より四節までを反復熟読せよ。信仰生活の特徴は遺憾なくこの数語の中に示されているではないか。これ

を靈的理解の上より見れば、神と和らぎ恵みに入り妙なる望みを与えられて勝ち喜ぶ心境であり、これを実際生活の上より見れば、苦難にありてもその生むところが忍耐、練られた品性、望みなるがゆえに勝利の光榮に酔う生涯である。これ即ち「私たちは、あらゆる面で苦しめられても行き詰まることはなく、追い詰められても立ち散向く道がなくなることはなく、迫害されても捨てられることはなく、倒されても滅びることはありません」という生涯である。後戻りせず、くじけず、進んでやまない生涯である。積極的、進取的にして光明といのちとを具有する生涯である。平和温良無害の人となることが決して信仰の目的ではない。いのちと力をもつて進撃する生活が真の信仰生活である。しかしながら注意すべきは、これは自力をもつて努力奮進してそうなるのではなく、主として救い主の十字架より流れ出るところのいのちの源に汲んでそうなるのである。我が本具のいのちに頼るのではなく、専ら彼の大きいなるいのちに浴してそうなるのである。信仰生活はいわゆる努力の生活ではない。十字架のゆえに罪の赦免に浴し、義でないのに義と認められるに至った大きいなる恵みに接し、感謝心に満ちて自ずから力ある歩みを引き起こす生活である。源あつての末である。原因あつての結果である。これ忘れるべからざる事である。そのゆえにこそ感謝は益々大きくなるのである。